

ぼくは
モナリザに
恋はしない

Kenji Endo
遠藤 健治

青山ライフ出版

● もくじ

月曜日	ニワトリ	5
火曜日	白球の行方	15
水曜日	ハッピーレイニーデー	29
木曜日	かがやく緑	39
金曜日	休店日	55
土曜日	死刑改正	63
日曜日	このプライドにかけて	89

月曜日
エワトリ

「いらっしやいませー」テーブル席を片付けていた店員が出迎えた。

「ここ煙草大丈夫かい」

「オッケーですよ。カウンター席にどうぞ」案内された席に腰をおろした。

「灰皿です」

「ありがとう。コーヒーね」

「かしこまりました。マスター、コーヒーおねがいします」

煙草に火をつけた。吸い込んだ煙をゆっくりと吐き出す。今日は朝から会議があったせいで、ずっとあわただしかった。デスクにはまだ山のように書類が積まれている。帰社する前のささやかな一服ぐらいはゆるされるだろう。

「お待ちどうさまでーす。ブレンドになります」

一口飲んだ。ほう、これはなかなか美味い。

「どうです？ おいしいでしょう」

顔をあげて店員を見た。店に入ったときも思ったが、とても若い店員だ。

「ああ、いいね。これは何か特別な豆を使ってるのかい？」

少年はさあ、といって首を傾げた。

「作り方はマスターしか知らないんです」カウンターの反対側をみると髭をはやした店主らしき男が

椅子に座つて本を読んでいる。

「そう。きみはアルバイト？」

「はい。あ、砂糖とミルクはこちらにあります。ごゆっくりどうぞ」一礼して戻つていった。

わりと広い店内だが他に客はいなかった。鞆から手帳を取り出して開いた。今週はなんとか一つ。月末までにあと三つも契約を取れるだろうか。じつと手帳を見る。来週はあそこあそこにもう一度いつてみようか。それとも高校の同級生のあいつのところについてみるか。うーん、それとも……。

「あの、よかつたらどうぞ」

先程のアルバイトの少年が小皿を差し出した。

「ビスケットです。コンビニのですけど」

なぜ？ という表情が伝わつたのだろう。少しあわてながら、

「甘いものをとると疲れがとれてリラックスしますよ」

「そんなに疲れてるように見えたかい」

「と言いますか、すごく難しい顔をされてました」

自分よりもおそらく二十歳は年下だろうという少年に気を遣われたことに、思わず苦笑いが漏れた。

「まあ仕事のことだね。大人になるといろいろあるさ」

「失礼ですがいわゆるサラリーマンでいらっしやいますよね」

「うん、いわゆるサラリーマンだね」

「将来のためにお聞きしたいんですが、サラリーマンにも才能の有り無しつてあるんでしょうか」

改めて少年を見た。十五、六といったところだろうか。今どきの子供にしては幼い顔立ちに見える。おかしな質問をするもんだなとも思ったが、ビスケットの礼もある。

「そうだね。やっぱりあるんじゃないかな。普通の人が一時間かかる仕事を半時間でこなす。そんな人は才能があるといえるんじゃないかな」

「そうですか。そういう人は出世しやすいんでしょうね」

「うん、そうだろうね」

ふと、社内の人間を思い浮かべた。一時間の仕事を半時間でこなすサラリーマン。同期のあいつ。仕事はもちろん、人付き合いも上手い。週に三日はジムに通うスポーツマン。長めの髪が全く嫌味に感じない清々しさ。彼なら三つの契約など苦もなくクリアしてしまっだろう。

「いや、全くその通りだね。サラリーマンにも才能が必要なんだ。そんなことも考えずにこの仕事を選んでしまった。もつとはやく気づくべきだった……」カップを持ち上げ口に近づけた。ふうつと軽く息を吐き、コーヒーを流し込んだ。

「あの、何かすいませんでした」少年は申し訳なさそうに言った。

「いや、いいんだ。きみのせいじゃないよ」煙草の灰がぼとりと落ちた。

「思い返してみれば研修の時から違ってた。みんな新人でまだ打ち解けていないはずなのにあいつの周りにはいつも人が集まってる」

「あの……」

「いや、誤解しないでくれ。俺は別にあいつが嫌いなわけじゃない。あいつは良いやつなんだ。おれとの仲も決して悪くない。ただ……」

「あのお客さん……」

「ただね、どうしてこうも違うのか。俺も決して仕事ができないわけじゃない。同僚ともそれなりに上手くやれてる。でもあいつは一步先をいつてるんだ。いつもね」テーブルに置いてある角砂糖をビンから取り出し、カップに入れた。ティースプーンでかき混ぜた。できた弱々しい渦をじつと見た。

「どうしてだろうねえ」俺は子供相手に何を言っているのだろう。少年が困った顔をしているのが想像できた。ビスケットの恩を仇で返してしまった申し訳なきにますます顔を上げづらくなった。

ふと雑誌のページをめくる音が聞こえた。その方向を脇目で見ると、マスターが少年を見ていた。その視線につられて少年を見た。少年は軽くうなずき後ろの棚の引き出しをあげた。そこから一冊の本を取り出した。裏も表も真つ黒の少し大きめの本だった。

「ちよつと失礼しますね」そう言ってコーヒーカップとビスケットの小皿をわきにどかし、その大きめの黒本を置いた。

「なんだいこれは」

「画集です」少年はバラバラとページをめくった。

「あつた。これをご覧ください」

「これは……鶏？」

「はい。伊藤若冲作『旭日雄鶏図』です」

確かに鶏だ。だがただの鶏ではないことは明らかだ。

「なんとというか、鶏にしてはちよつと雄雄しいというか偉そうな感じだね」

「そうですね。松の木に片足で立つ雄鶏が、左上の真つ赤な朝日に向かって鳴いていますね」

「それは分かるよ。でもこの鶏の違和感は何だろう」掛け軸のど真ん中で目を見開いて吼えているから、というだけではないだろう。

「この若冲という作家は、実物を忠実に描くということをしませんでした。常にその対象物の本質を求めたのです。ほら、ここを見てください。雄鶏が立つ松の枝。三角おにぎりみたいに不自然に曲がっているでしょう。そしてこの雄鶏の一枚一枚の尾羽の曲線の滑らかさ。首から腰にかけての羽の重なり具合。それを絶妙な色使いで実物よりもよりエネルギーギッシュに描いています。構図がシンプルだからこそ、雄鶏のふてぶてしさが際だっていますよね」

「たしかに面構えといい、じつに堂々としているね」

「ここにいるのはもはやただの鶏ではありません。そう、いわば鳳凰のようじゃありませんか」

「鳳凰か」もう一度鶏を見た。赤々と昇る太陽にたいして全く怯む様子がない。いや、むしろ太陽よりも自分のほうが熱く輝いている。そう思つて吼えているようにも見える。

「うん、こいつはまさに鳳凰だね。おれにもそう見えるよ」

「カッコイイですよ。若冲の鶏の中でぼくはこれが一番好きです」少年は笑顔を見せた。

「ところでなんでこの絵を俺に見せたんだい」この鳳凰のように胸を張れつてことかな。

「若冲が絵を描くとき、まずやったことは観察でした。まずよく見る。何日も何日もよく見る。よく見ることで、その対象物が発する気を見ることができるようになつたらしいです。その気が本質を表していたということですね」

「本質ね。鶏の本質は鳳凰ということかい」

「若冲にはそう見えたのかもしれないね」

「それが俺と何の関係が？」

「この絵は本当に素晴らしい。この鶏はまさに鳳凰です。でも」

「でも？」

「鶏はやっぱり鶏です」おれは首を傾げた。

「若冲は美によく観察しました。だから鶏の姿に鳳凰を見ることができました。でも逆を言えば鶏の

姿を鳳凰と見てしまった、とも言えるんじゃないでしょうか」

「申し訳ない。もう少し分かりやすく頼む」

「お客さんが何がきつかけでそのあいつを観察するようになったのかは分かりませんが、それほど気になさることもないんじゃないですか。要は自分の気の持ち方じゃないですかね。じゃないと知らず知らずのうちにただの鶏を鳳凰にしてしまっているかもしれないよ」

その日の午後。

あいつが同僚と話している。おれはPC越しにそっと視線を向けた。鶏か……。考えてみれば、おれとあいつは同じ年なんだ。肌ツヤなんかたいして変らないんじゃないか。そう言えば俺ほどじゃないが、前よりも腹が出てきた気がする。スポーツクラブに通ってあんなもんなのか。何だよ、こりゃあ本当に、ただの鶏をこっちが鳳凰に見ただけじゃないのか。思わず笑い声が出るのを何とかこらえた。

あいつが仕事が出来るといっても、任される仕事の質にさほど差があるわけでもない。そりゃ手際のおよさつて言う意味じゃ敵わないが、それでも俺は俺なりにキャリアを積んできてあいつにはない人脈もできた。この人脈が将来、果報を連れて来る可能性だつてゼロじゃない。そう思うとなんだか体が軽くなった。

気にしすぎだったのか。なぜ今まであいつと自分を比べて落ち込んでいたんだろう。ジムで鍛えた体のせいか。それとも風になびく少し長めの髪のせいか。髪は無理だが、体のほうは何とかかなりそう。帰りに近所のジムの覗いてみようかな。

数日後。

「昼飯行くか」部長に誘われた。

「昨日の書類良かったな。上手くまとまっていた」

「ありがとうございます」

「お前、最近ノってるよな。いい女でもできたか」

「いえ、そんなことないです」

「まあいい。来週、〇×社の連中が来る。お前が進行しろ。もともとお前の企画だからな、お前に任せる。おれは見てるだけ」

商談は驚くほどスムーズに進んだ。こちらの説明後、相手の質問にも澁みなく答えた。仕事でこれほどの充実感は初めてと喋っていいだろう。会心の出来だった。

契約書を交換したところで先方が部長に話しかけてきた。片づけをしながら耳の神経が自然とそちらに向いた。

「羨ましいですな。人材育成が見事に成功していらっしやる。将来のエースといった感じですかな」
「いやあ、とんでもない」と言いつつ、まんざらでもない笑顔の部長。

「私から見たら、まだまだひよっこですよ」

……ひよっこ。え、ヒヨコ？

「外回り行つてきます」

とっさに声の主を探した。

窓の日差しがあいつの髪を黄金に染める。天空に舞う翼のように、煌めく髪をなびかせながら階段を下りていった。

火曜日
白球の行方